『ぱんだの
ぬいぐるみ』

アートストリームを弾みに世界へ飛躍

ポップアーティスト

ハタヤママサオさん

1976年大阪府出身。会社員時代の2004年から本格的にアート活動を開始。独創的な色彩感覚で、独自の "Japanese Pop Art" を表現。パリを中心に海外での個展や国内外のアートプロジェクトを展開する一方、官公庁や企業コラボなど活動は多岐にわたる。2010年UCCコーヒー〈コーヒーアート大賞〉佳作、2013年、2015年アートストリーム〈企業・ギャラリー賞〉受賞。

関西・大阪21世紀協会は、2003年から2019年まで、新進アーティストに作品発表の場と業界関係者との出会いの機会を提供する「アートストリーム」を開催してきた。ハタヤママサオさんは、これを弾みに活躍の場をさらに広げ、念願の「パリ個展」も実現。絵を描く楽しさがほとばしる独創的な色彩感覚で、今や国内外で多くのアートファンを楽しませている。

遠かった「憧れの場」

ハタヤマさんがアートストリームに初めて出展したのは2008年、32歳のとき。それまでは描き貯めた絵をポストカードやバッジなどに加工して各地のアートイベントに参加したり、知り合いに頼んでカフェに置いてもらったりしていた。路上販売時代は、1日かけてポストカード1枚（150円）しか売れなかったこともある。SNSが普及していなかった当時、ハタヤマさんにとって大勢の人が集まるアートストリームに参加することは、唯一かつ最大のアピール方法だった。

路上販売時代

「ギャラリー（画商）に所属せず、美大卒じゃない素人同然の私でも参加でき、しかもプロのアーティストや業界の方々に評価していただけるのはアートストリームしかありませんでした。路上と違って壁（専用ブース）があるのも嬉しかったですね。何より、ここで受賞すれば仕事のオファーも受けられる。私には憧れの場だったし、大きなチャンスでした」

アートストリームにて（2013年11月）

しかし初出展の2008年は受賞を逃した。それどころか2012年まで公募審査に落選し続け、出展すら叶わない。この間、大手百貨店のビジュアルデザインを手がけたりカフェで個展を行ったりして少しずつ活動の幅を広げていったが、毎年、アートストリームに出展できない悔しさを味わった。アートストリームは出展希望者が多く、作家のレベルも高いうえ選考も厳しい。だから5年後の2013年に2度目の出展を果たし、企業・ギャラリー賞（大阪水上バス賞、関西・大阪21世紀協会賞）をダブル受賞した喜びは格別だった。

二足のわらじ

「パリやニューヨークで個展をしたい。そして世界で通用するアーティストになりたい」

当時、ハタヤマさんは受賞の喜びを聞かれてそう語っていた。とはいえ海外展開のあてやプランは何もなく、「完全に夢でした」と振り返る。当時は一般企業に勤める営業マンで、アート活動は休日のみ。平日は帰宅してから明け方近くまで絵を描くこともあり、土日を中心に東京や大阪

『夢見るパリ』

のアートイベントに出展していた。サラリーマンをしながらアーティストと名乗るのは気が引けたが、続けるうちにファンが増え、原画がほしいという人も出てきた。しかし、それでも会社を辞めるつもりは全くなかった。

就職氷河期に大学を卒業したハタヤマさんは、起業家を目指して販売系のビジネスを興すが失敗。睡眠時間を削っていくつものアルバイトを掛け持ちする日々を送っていた。初めて正社員として企業に就職したのは28歳のとき。アート活動を始めたのは、大好きな絵で自分の可能性を試すためと小遣い稼ぎだったという。以後、二足のわらじを続け、アートストリームに出展した2013年は37歳。受賞は大きな励みになったが、結婚して一児の父親になり、二度と独身時代のような不安定な生活には戻りたくないという思いが強かった。

しかしその3年後、転機が訪れた。フランスを代表するアートフェア『サロン・アート・ショッピング・パリ』に作品を送り、世界の反応を見てみないかと誘われたのである。

パリでの直感

会場はルーヴル美術館の地下サロン『カルーゼル・ドゥ・ルーヴル』。有名なファッションショー『パリコレ』の開催場所でもある。ハタヤマさんは、どうせなら世界のアート市場を自分の目で確かめたいと、2016年10月、有給休暇をとって憧れのパリ行きを決行した。

アートストリームの数倍はありそうな広さの会場には、世界各国からアーティストや美術関係者、メディア、アートファンが大勢詰めかけていた。そこで感じたのは、想像とは違う意外なものだった。

「世界中からアーティストがやってくるんだから、自分に似たタッチの作家も当然いるだろうと思っていました。でも全部見て回ったところ、自分と被っている作品がない。これなら自分の力でもイケるんじゃないかって直感したんです」

アーティストの未来へ向けた活動を応援
アートストリーム

大阪・関西を拠点に活動するアーティストに、発表の場と業界関係者とのマッチングの機会を提供する展覧会・マーケット。大阪が感性豊かな創造者が集う都市となるには、文化創造の主役たる人を積極的に受け入れ、支える仕組みを作ることが必要であるとの考えから、2003年から2019年まで開催された。主催はアートストリーム実行委員会（大阪芸術大学、大阪府、大阪市、関西・大阪21世紀協会）。湊町リバープレイス、サントリーミュージアム［天保山］、大丸心斎橋店で開催され、出展者は一般公募し選考を経て決定。選考を前提にすることで、参加すること自体がアーティストの目的となり、参加意義を明確にした。直近5年間は毎回約90組が出展。海外アーティストも参加するなど、大規模なアートマーケットとして注目された。

大丸心斎橋店での開催風景（2019年）

『サロン・アート・ショッピング・パリ』には大勢のアーティストが参加しているものの、作家の実力や作品のレベルはさまざま。初参加のハタヤマさんはそれをよく知らず、「（イケると直感したのは）大きな勘違い。でも、これでスイッチが入った」という。

活動を海外に広げるとなると、サラリーマンをしながらでは難しい。現に国内ですら依頼に応えるのが精一杯で、制作時間が足りずに納得いくまで作り込めないときもあり、ファンに申し訳ないという思いも募っていた。このとき40歳。「アートで勝負するなら今しかない」と、13年勤めた会社を辞めて独立する決心をした。

大阪ならではの風景

パリでスイッチが入って1年後の2017年、大阪府大東市にアトリエ兼ショップを構え、名実ともに“ポップアーティスト・ハタヤママサオ” としてスタートした。そして最初の依頼が、大阪水上バス株式会社が運行する『アクアライナー』を全面ペイントするという大仕事。きっかけは同社の幹部が水上バスを描いたハタヤマさんのステッカーを見て、実際に走らせたら面白いと思ったことだった。アクアライナーは大川の大阪城港～中之島間を周遊する全長約30mのクルーズ船で、こうした船にアートを施すのは日本初だった。

「新たな人生の船出に船をペイントするって、幸先の良い最高の仕事だと思いました。夏の炎天下で1週間、気合が入っていたので全然辛くありませんでした」

ギャラリーショップ（6階）のあるビルに描かれた『HOPETREE』
（大阪市中央区西心斎橋1-13-1 おおきにHOPETREE心斎橋）

大阪水上バス『ハタポップライナー』

この船は『ハタポップライナー』の愛称で親しまれ、大阪ならではの風景の一つとして観光ガイド本にも紹介されている。そして、これを機に大阪梅田ロフト（大阪市北区）や千島団地（同大正区）など、ミューラルアート（壁画）の依頼も増えた。

「僕の作品の前で記念撮影をしている人を見ると嬉しいですね。ミューラルアートを見てショップに来られる人もいて、良い宣伝にもなっています」

アートを始めたときから多くの人の目に触れることを念頭に置いているため、グッズであれ、ミューラルアートであれ、向き合う思いは同じだという。

海外活動への思い

独立して1年後、ハタヤマさんはついに念願のパリ個展を実現した。さらにその翌年にはニューヨークのアートマーケットに参加して完売。作品が台湾の蔡英文総統への贈答品に採用されたり、2025年大阪・関西万博のカウントダウンイベントや堺百舌鳥古市古墳群世界遺産登録記念での作品を制作したり、東南アジアの恵まれない地域に学校や井戸を造るチャリティーオークションで原画が落札されるなど、活動は多岐にわたりメディアにも度々取り上げられた。2020年にはショップを大阪心斎橋に移転。そのビルをミューラルアート『HOPETREE（希望の樹）』で埋め尽くして話題になった。

原画が売れると、それを元手に海外活動に弾みがついた。現在、ニューヨークやバルセロナ、ミラノ、ドバイでの個展やアートフェアへの出展が決定しており、着々と海外進出の地歩を築いている。

パリ初個展「ARTISTE POP JAPONAIS」にて（2018年10月）

「おかげさまで国内ではいろんな企業からの依頼が増えました。次はその世界版をやりたいんです。例えば世界的に有名なブランドとコラボして、自分のファンを世界に広げたい。世界で今どんなアートが求められているのか知るために自ら現地に出向いて、海外でやっていく肌感覚を養いたいと思っています」

いずれは海外拠点を持ちたいというハタヤマさん。海外での個展開催は準備の手間や費用がかかるが、今は自分への投資のつもりだという。

ポップアートで世界をHAPPYに

2022年2月、ハタヤマさんは自身の半生を綴った『ポップアートで世界をHAPPYにする男』を上梓した。その帯には「どん底だった男がどうしてパリで個展をするまでになれたのか!?」とある。路上販売からアートストリームでの受賞を経て現在にいたる活動は順調そのものに見えるが、「実はうまくいくように実行していることや心がけていることがあるから」だという。それは、数々の失敗や成功に学び、依頼者の思いを汲んで誠実に仕事に取り組む姿勢にほかならない。

『ポップアートで世界をHAPPYにする男』
トキツカゼ出版
（B6版・163頁／インターネットで販売）

「ハタヤママサオをもう一人の自分がプロデュースしている感覚が常にあります」

現在、SNSやYouTubeを駆使して、自身の活動を積極的に発信している。パリでの勘違いを正解に変えたのは、そうしたセルフプロデュースに加え、会社員時代に培ったビジネス感覚があってこそだろう。ショップには、原画のほかに作品をプリントした小物やアートボックスも多くある。最近は作品（原画の複製）のレンタル、いわばアートのサブスクもはじめた。

「原画を買うとなるとハードルが高いですが、普段使っているものをちょっと華やかにしたり、身の回りをカラフルにしたりできるのは、ポップアートならではの楽しみ方。僕の作品で少しでも日常が明るくなり、元気な気持ちになってもらえれば嬉しい」

著書では、アーティストにとって一番必要なことは「人の心を揺さぶる作品を生み出せているかどうかを常にチェックして、そういう作品を生み出すために日々邁進すること」と述べている。ポップアートで世界をHAPPYにする原動力がここにある。

（写真提供・ハタヤママサオさん）

2022年11月28日／大阪心斎橋・hataPOPgallerySHOPにて
（ライター 三上祥弘）